

萩

Vol 20

ものがたり

萩往還を歩く

萩ものがたり編集部 中澤さかな

唐櫃札場跡から
防長国境付近まで

H2

N

シリーズ

萩

ものがたり 20

萩往還を歩く

唐樋札場跡から
防長国境付近まで

中澤さかな



表紙写真：一ノ坂御建場付近の石畳道 表紙裏写真：峠板一里塚に向う古道

歴史の道 萩往還



萩往還は、萩城下町の唐樋札場（現在の萩市）と三田尻御茶屋（現在の防府市）を結ぶ行程約五三km（十二里弱）の街道。関ヶ原の戦いで敗れた毛利

氏が萩城に居を移した後の慶長九年（一六〇四）、参勤交代道として整備された。全ルートは、ほぼ現在の国道二六二号の原型を成すものとなっているが、街道中の難所と呼ばれた悴坂峠付近・一升谷付近・一ノ坂付近には、今も多数の石畳道が残り、延々と続く古道が往時の街道の姿を留めている（昭和五十七年から昭和六十三年にかけて、復元整備工事が実施されている）。ルート上には一里塚（唐樋札場跡を起点に四里ごと）に設置された道標、往還松（日除け・風除けのため街道筋に植栽された）などの交通施設や、茶屋（殿様用の休泊施設）、御建場・御駕籠建場（殿様用の休憩施設）、庶民用の休憩施設であった茶店などの遺構が残り、また宿駅となった街道筋の集落には往時の面影を偲ぶ風物が今に伝えられている。

このブックレットでは、当時の面影の色濃く残る唐樋札場跡から防長国境付近まで、行程の約半分（約六里）を筆者が歩き、所要所要を写真と文章で紹介するスタイルとした。石畳の坂道を登りながら「この石畳を松陰先生をはじめとする維新の志士たちが踏みしめて行ったのか」と思うと、何かしら神秘的な気持ちにもなった。近年のマラソンブームや健康志向で、このルートを活用したマラソン大会やウォークラリーが盛んに開催されるようになったが、飛脚や早馬のように脳目も振らずに駆け抜けるのではなく、街道沿いの歴史・風物・自然を楽しみながら、ゆっくり、じっくり、古道を味わうのが、こくと歩いて欲しいと感じた。

萩往還に関しては多くのルートマップがこれまで作られてきている。その中でも「萩往還マップづくりワークショップ」の皆さんが丹精を込めて作られた「萩往還・散策マップ」は飛びぬけて秀逸。従前から紹介されてきた遺構や見所に加え、実際に歩いた方々でないと発見できない路傍の風物や、往還沿いに住む人々のコメントなど、萩往還を楽しく歩くさまざまな情報が収録されている。今回ブックレットをまとめるにあたり、この「萩往還・散策マップ」を参考にさせていただいた。ワークショップに参加された皆さんに改めて

敬意を表します。また、校正段階で入念なチェックとアドバイスを頂いた関係者の方々にもこの場を借りて感謝致します。

その他文献としては左記を参照しました。

- ふるさと旭 一九八五 旭村教育委員会発行 ●歴史の道「萩往還」整備・活用マスタープラン二〇〇二 国土交通省 都市・地方整備局発行 ●歴史の道調査報告書（萩往還）一九八一 山口県教育委員会発行 ●歴史の道「萩往還」復元整備工事報告書 一九八六 萩市教育委員会発行 ●歴史の道「萩往還」保存整備事業報告書 一九八九 旭村教育委員会発行

なお、掲載画像はすべて筆者による撮影です。

萩往還を歩く 目次

歴史の道 萩往還	2
目次・施設解説	4
萩往還ルートマップ	6
唐樋札場跡	10
大木戸跡・金谷天満宮社	12
涙松跡	14
倅坂一里塚	16
大屋刑場跡	18
倅坂御駕籠建場跡	20
倅坂	22
殉難三士之碑	24
明木の松陰歌碑	26

明木市	28
明木川	30
明木市の町並み	32
萩往還と赤間関街道の分岐	34
一升谷の石畳道	36
上の茶屋と下の茶屋	38
落合の石橋	40
佐々並市	42
佐々並市の町並み	44
日南瀬付近	46
上長瀬一里塚	48
夏木原口屋・氷室跡	50
防長国境の碑	52
一ノ坂建場跡（六軒茶屋）	54

萩往還沿いの主要施設【解説】

札場（高札場）

幕府や藩の御触れ（法令や規則）を掲示する場所。長方形の土垣を石垣で囲み板葺き屋根の付いた掲木板が柱に支えられて立っていた。有名な『慶安の御触書』（一六四九）では、「百姓は酒・茶を買って飲んでほならない」などと理不尽なことが書かれていた。

一里塚

基点から一里（約四里）ごとに造られた築山道標。慶長九年（一六〇四）以前は現在の山口市道場門前橋を基点としていたが、それ以後は萩市唐樋札場を基点とした。萩往還には往時十基以上の一里塚が築かれたと思われるが、元治元年（一八六四）藩命によりその多くが撤去された。萩往還沿いで現存するのは萩市倅坂と上長瀬の二カ所、他の往還沿いの一里塚はすべて後世に復元されたもので、その復元場所も当時と違っている場合があるという。

往還松

街道に沿って植栽された松。防風、夏季の日陰作り、冬季の積雪除けなど、往還を行く旅人の保護のため、また敵が攻めて来た時の防衛の役割を果たしたという。往時は約一間（一・八m）間隔に、道の両側に植えられ、勝手に切り倒すと重い罰を科せられたという。

御茶屋

萩往還沿いの最も規模の大きい施設。藩主の休泊施設として整備され、往還ルート上には、佐々並・山口・防府に設けられた。

御駕籠建場（御建場）

藩主の領内通行の際、比較的見晴らしの良い場所で駕籠を降ろして休憩する場所として整備された。萩往還には、倅坂・新切（中ノ峠・日南瀬・一ノ坂・終、鯖山に設けられた。その造りは、駕籠を置く切芝の台を設け、それを柴垣で囲み、近くに手洗場をセットしたもの。

口屋

通行人の取締りを行つた小規模な関所のような場所。萩往還では、大屋・夏木原・木町・鯖石などに設けられた。口屋では口屋銭といつて一種の通行税を徴収していたという。

宿駅

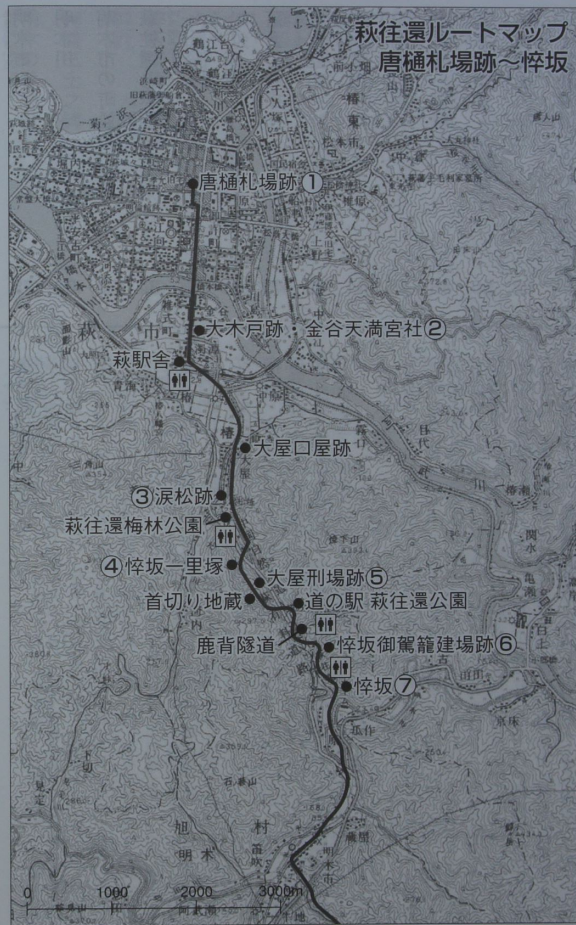
宿駅は人・荷物・通信物などを輸送したところで、目代と呼ばれる役人が人馬や駕籠の調達、賃金の徴収を行つた。萩往還では、明木・佐々並・山口・宮市・三田尻が宿駅としての機能を持ち、目代所が置かれた。

茶屋（茶店）

萩往還は多くの庶民も通行したため、庶民向けの休憩宿泊施設も整備され、藩主用の御茶屋と区別して茶屋（茶店）と呼んだ。往還沿いには、倅坂・新切・夏木原・一ノ坂・鯖山峠ほか数箇所にあった。

狼煙場

遠方への通信手段として、見通しの良い山頂に設けられたのが狼煙場。萩往還沿道付近では、日南瀬峠西側の岩城山・野丸岳・笛吹の石の巻山・新切の高焼山などにあったと伝えられる。狼煙場には火を焚く長方形の石組みと番小屋があったという。





あと ば だ ひ から 唐 樋 札 場 跡

MAP-①



三 札 場 跡

藩政時代の唐樋は以下町の中心地として札場(唐樋)があり、商人ののどろした所となる。また陸奥国から、ここから運搬を兼ねて、重要視。慶安古園を見ると、三角州北東の浮島・流り口・迎りから大きく南に入江が入り込み、泥地の帯原を形成しているのがよく分かる。

藩政時には三角州中央付近まで浸水し、その逆流を止めるために作った木門が唐樋下流の町影石となつた。唐樋と陸奥下流の町影石とを繋ぐと、唐樋と陸奥下流の町影石とを繋ぐと、一部となり、川中の流島も沖原の一部に吸収されて幅広かつた大川も狭くなり、地形が変化するして城下町の完成された様子がよくわかる。

萩往還の起点であることを示す看板や案内板が設置されている。北側にある空地には小さな公園が整備される予定。

萩城下から三田尻まで全長約五三kmの萩往還、その起点となるのが唐樋札場。萩城を出て、御成道(おなりみち)を東に進み、南に折れてすぐの場所に位置する。ここは周防・長門(すおう)両国の一里塚の基点となつた場所で、一里塚の位置を示すのに、萩藩の一里塚の塚木(つかぎ)には「従萩唐樋札場〇〇里」と書く習わしになっていた。慶安年間(一六四八〜)

に描かれた古地図を見ると、現在の松本川から三角州中心部に向けて入り江が湾入、大きな湿地帯(芦原)を形成しており、満潮時には度々浸水の被害があつたようだ。その水の逆流を防ぐための唐樋門があつたことが、唐樋の地名の由来とか。

藩政時代には幕府や藩庁からのお触書を掲示した高札(こうさつ)が立っていた。また罪人がさらしものになっている光景もあつたという。現在は萩バスセンターや商店街が隣接するなど、萩の中心的な場所となっているが、当時も交通の要衝として賑わいをみせていたのだろう。

●萩往還沿道メモ

萩往還のモニュメント



御影石(おかげいし)で造られた萩往還のモニュメント。上部が曲がついているのは、曲りくねつた往還道をイメージしたデザインだろうか。街道沿いのここかしこに設置されている。

おおきど かなや
大木戸跡・金谷天満宮社 MAP-②



大木戸跡地、遺構は残っていないが由来を記した案内看板が立っている。

唐樋札幌跡を過ぎて国道二六二号を南下、橋本川に掛かる橋を越えてしばらく歩くと老松の林の中に丹塗りの大きな神社が見えてくる。鎌倉時代の文治二年（一一八六）、長門国守護・佐々木四郎高綱が筑前大宰府天満宮から勧請し、総鎮守社として現在地の奥に建造したと伝えられる。江戸中期の享保五年（一七二〇）五代藩主・毛利吉元が現在地に壮大な社を再興した。秋に開催される萩時代祭りは、萩城を起点に大名行列のパレードがスタートし、この金谷天満宮社が終点となっている。

また、現在では遺構は残っていないが、この場所には、萩城下町の表玄関ともいえるべき大木戸があった。大木戸は両側を柵で囲い中央に門があり番所が置かれ、門番が常勤していた。原則的には日暮れから夜明けまで、城下町内の治安維持のため、出入を制限していたという。

●萩往還沿道メモ

萩駅舎（国登録文化財）



萩の南の玄関口にある萩駅は、大正十四年に洋館駅として建設された。ほとんど建設当時の姿に復元しており、平成八年に文化庁の登録文化財に指定された。駅舎内は「萩市自然と歴史の展示館」となっており、萩の四季折々の風景や歴史をパネル写真やビデオなどで分かりやすく紹介している。入館は無料。

涙松跡

なみだまつ

MAP ③



唐樋の札場を發つて街道を南に下り、橋本川を渡つて大屋地区に入ると、路は緩やかな登り勾配となる。今も残る木立の中の里路を進むと吉田松陰歌碑「涙松跡」がある。ここを過ぎると萩の町が見えなくなつてしまつたため、人々は木立の間から見え隠れする故郷に惜別の涙を流し、また帰郷の際にはこの場所が無事戻つた嬉し涙を流したということから、いつのまにかこの場所が「涙松」と呼ばれるようになった。安政六年（一八五九）五月、安政の大獄に連座し江戸送りとなつた吉田松陰は、ここで「かへらじと思ひさだめし旅なれば ひとしほぬる、涙松かな」の一首を残し、この松が一躍有名となった。かつては、松の並木が続き、飛びぬけて大きい松の巨木があつたというが、現在は数本の松が残るのみ。歌碑は大正三年、地元椿村青年会による建立、碑の裏面にはその経緯が記されている。木立や家々の屋根の向こうに、今も萩の家並みと指月山が見える。



涙松の碑の隣に立つ松の老木。松陰先生が和歌を詠んだ当時の松は、先生を見送つた十年後に枯れたという。

●萩往還沿道メモ 萩往還梅林園



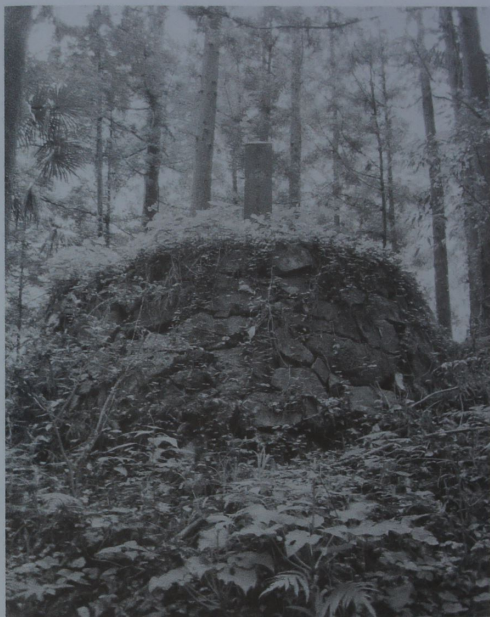
涙松跡を過ぎてすぐの右手に萩往還梅林園がある。紅白梅二六〇本が香り高い花を咲かせる観梅スポットで、見頃は例年二月中旬から下旬。東屋や池などが配された日本庭園のような趣きのある広い梅林。入園料は無料。

かせがきか

悴坂一里塚

(国指定史跡)

MAP ④



これまでのアスファルト道が、一里塚手前から土の路となる。竹林のトンネルで昼間でも薄暗い。



萩往還には唐植札場を起点として一里(約四km)ごとに大きな石

積み道の標が建てられている。悴坂一里塚は萩を出発して最初の一

里塚。現在、ここまでの道程はアスファルト道だが、この一里塚の

手前から石畳と土の路となる。一里塚は盛り土をした上に玄武岩で

石垣状に覆った形状、その上に石材で作った道標が建てられている

が、当時は木で作られていたという。元治元年(一八六四)防長兩

国の一里塚を取り除き常緑樹を植栽することが指示されたが完全に

は実施されなかったことや、後世の幹線道路から外れたルートにあ

ったことから萩往還の道程にある一里塚では、もっともその原型を

留めているとされる。

●萩往還沿道メロ沿道の植物



萩往還を歩くと、路傍の植物や昆虫などが目を楽しませてくれる。筆者が歩いた季節は梅雨明けの頃、悴坂一里塚付近でも自生したと思われるアジサイの花があちこちで咲き誇っていた。

おおや 大屋刑場跡

MAP ⑤



悴坂一里塚から竹林のトンネルを南に登っていくと大屋刑場跡がある。宝暦九年（一七五九）毛利藩医、栗山孝庵（一七三一〜一七九一）、山脇東洋の高弟。七代藩主重就、八代藩主治親の侍医を務めた）が日本で初の女性解剖を指導した場所としても知られる。山脇東洋の日本初の人体解剖から五年後のこと。死体は隣村川上村の女性で、藩士との不義密通を夫から問いつめられたことから夫に大けがを負わせ、極刑に処せられたという。

現在、遺構はなく竹林に覆われた一角となっており、栗山孝庵（獻臣）女刑死体貯分之碑がその名残を留めている。その碑のすぐそばには刑死者を供養するための石地蔵があり、鮮やかな赤色の帽子と前掛けが目焼きつくように飛び込んでくる。石地蔵の周りはいかに掃除が行き届いており、現在でもお守りをする人がいることが分かる。



大屋刑場跡の石地蔵。別名、首切り地蔵と呼ばれている。

●萩往還沿道メモ 道の駅・萩往還公園



道の駅の敷地内には維新の志士の像が並び、無料で入館できる資料館「松陰記念館」が併設されている。まさに現代の萩の玄関口とも言える場所。写真は「道の駅」の前にある三英傑の銅像。左から高杉晋作・吉田松陰・久坂玄瑞。

かせがさか かごたてば
悴坂御駕籠建場跡 (国指定史跡) MAP-⑥



道の駅・萩往還公園の脇を登るアスファルト道をしばらく進むと萩往還の石のモニュメントがあり、ここから悴坂の山道に入る。かなりの急坂の先に萩と明木村の境界を示す道標があり、こじんまりした東屋風の建物が現れる。これが藩主一行が駕籠を下ろして休憩した悴坂御駕籠建場。萩城下を出発して約五皿にある最初の休憩地。駕籠を置く切り芝の台が二箇所、その周囲に一間半から二間半の柴垣を設け、近くに簡易の手洗いを配置していた。道の向かい側には、正式な御茶屋ではないものの床や囲炉裏を備えた常設の休憩所が設けられていたという。現在の建物は当時の古図を元に復元されたもので、当時の遺構は残念ながら残っていない。現地は杉林におおわれうっ蒼としているが、当時は草地である程度の展望もきいたと思われる。



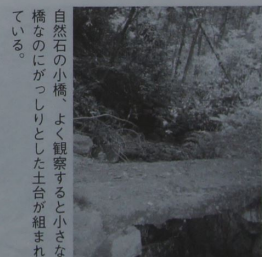
● 悴坂の山道入り口にあるモニュメント。山道の傾斜は三十度ほどもあり結構な急坂。

● 萩往還沿道メモ
 悴坂御駕籠建場のある場所の真下を鹿背隧道(トンネル)が貫く。明治十六年に着工し翌年完成。明治十年代に作られた石張り道路隧道として大変稀少で、一八二mの総延長は我が国最大の長さとなっている。



かせがさか 悴坂

MAP ⑦



自然石の小橋、よく観察すると小さな橋なものがつしりとした土台が組まれている。

鹿背隧道の出口付近にある休憩所を過ぎ、しばらくすると市道から明木原方面に向けての分岐点がある。ここから明木原までの約1kmは、樹木のトンネルを抜ける本格的な古道となる。急坂には石畳を敷きつめた部分が所々にあり、表土流出によって道が荒れるのを防いだものと思われる。通る人も少ないため、石畳の表面が濃緑の苔で覆われ往時を偲ばせる風情となっている。路の脇には谷川が流れせせらぎの音が心地よい。明木原に出る手前には、大きな自然石を加工して架けた幅1m・長さ2mほどの小橋があり、その下を清流が流れる。分岐点から約1km、突然に視界が開け明木原に出る。山の斜面に石垣を組んで築き上げた段畑では明木名産の柚子がさかんに栽培されている。

●萩往還沿道メモ ユキノシタの群落



悴坂には何箇所かユキノシタの群落が見られる。ユキノシタは沢沿いの岩場など、湿り気の多い半日陰の場所に生育する植物。五月から六月にかけて花茎を伸ばして純白の可憐な花を咲かせる。葉は火傷などに貼り付いたり、絞り汁を熱冷ましに利用するなどの民間薬として利用されてきた。

殉難三士之碑

MAP ⑧



街道沿いの土手下にある石地蔵。殉難三士の霊をなぐさめるために建てられたと伝えられるが、明木川に流れてきた地蔵を明治の時代に祀ったという説もある。



山越えの古道を下り終えて明木川沿いの土手道を歩く。街道沿いの土手から少し降りた場所に小さな地蔵があり、この地で命を落とした殉難三士の霊をなぐさめるために建てられたという。幕府の長州征伐の頃、藩論が沸騰して正義派（高杉晋作に代表される庶民を戦力化した諸隊）と俗論党（幕府恭順党・萩軍）が相争っていた折、萩城下の鎮静会議員（正義派と俗論党の激突を避けるために動いた中立有志の集団）のうち香川半介、桜井三木三、冷泉五郎、江木清次郎の四士が藩内和平のため、萩から山口諸隊の本営に使用した帰路、反対派に襲われた。香川、桜井、冷泉の三士が、慶応元年（一八六五）二月十一日の夜、明木川の北ここの権現原で絶命、江木ひとり何とか難を逃れたという。三人の冥福を祈る石碑は、地蔵のある場所から西方面に、萩有料道路を横切った山手の場所にあり、事件の詳しい経緯が記されている。

●萩往還谷道メモ

えはし
鳥帽子岩



峠坂から、明木原に向かう谷筋の道の右手に鳥帽子岩がある。殉難三士のうち、香川半介と冷泉五郎の首をこの地にさらしたと伝えられている。

明木の松陰歌碑

MAP-⑨



萩有料道路の下をくぐると明木市の入り口となる地点に出る。そこには吉田松陰の立派な歌碑が建てられている。安政元年（一八五〇）伊豆の下田で国禁の密航を企てて失敗、囚われの身となって萩へ護送される途中、明木橋をわたる時にこの詩を作った。この詩は中国前漢の司馬相如（紀元前一七九年～紀元前一二七年前漢時代の文章家。武帝に仕え、その才能を高く評価された。）の故事に倣ったもので、「少年の頃、志すところがあり、再び明木橋を渡って帰るの名を成してからと思ったものだ。そして今、檻に入れられて送り返されてきたが、自分としては国のためにしたことであって、故郷に錦を飾って帰る思いである」という意味。なお現在の明木橋は、歌碑のある場所から約1km上流にあり、藩政時代にはまたさらに上流に架けられていた。明木川には今もその橋脚土台となった岩が残っている。

過明木橋

少年有所志
題柱學馬卿
今日檻輿返
是吾畫錦行

黒御影石に刻まれた松陰先生の詩「過明木橋」

少年志すところあり、柱に題して馬卿を学ぶ。今日檻輿の返、是吾が畫錦の行。

●萩往還沿道メモ

明木川



川幅も大きくゆったり流れる明木川、ここから明木原を経由して川上で阿武川本流に合流する。昭和の頃まで、秋祭りにこの河原で草鞆馬が行われたという。

あきらぎいち
明木市

MAP-10



萩から数えて最初、そして江戸からは最後の宿駅、それが明木市。また萩と下関を結んだ街道「赤間関街道」と萩往還の分岐点としても栄えた。江戸時代後期には七十三軒もの商家や民家が軒を連ね、御茶屋や人馬の調達をおこなった目代所などもあった。明治二十四年（一八九二）の大火で町並みの大部分が焼失、その後往年の町並みに沿って再建された。昭和三十年（一九五五）に隣接の佐々並村と合併し旭村に、平成十七年（二〇〇五）の大合併で現在は萩市となった。毎年十一月の明木神社秋季大祭では「お供え行列」が地元住民によつて奉納される。萩往還を歩いた当時の様子を再現し、弓や箱など古式の御道具を交代で持ちながら街道を練り歩く。またゴールデンウィークには「萩往還まつり 技・明木展」が開催され、沿道の商家や民家の軒先で工芸品や特産品が展示即売される。往還道に沿って赤色の石州瓦屋根が軒を連ねる町並みがとても印象的な集落だ。



乳母の茶屋前に明木市のイラストマップがある。詳しく町並みが紹介されているので、街歩きの際の参考になる。

●萩往還沿道メモ
乳母の茶屋



ここに住居を構えていた佐々木家の先祖に毛利家の乳母をした人があって、毛利公からお茶屋を下賜されたと言い伝えが残っていることから「乳母の茶屋」と命名された。現在は萩往還を訪れる方々と地元住民が交流する拠点施設となっている。

明木川

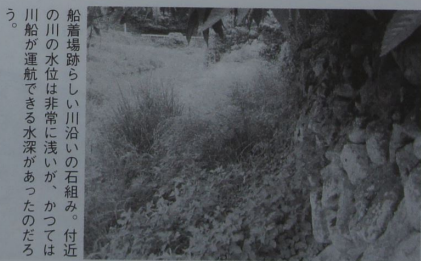
MAP ①



明木市から城下町萩への物流を担ったのが明木川。鹿背隧道が開通する明治初年頃まで、川上を経由し阿武川本流から萩に船が下っていった。かつては米・塩・酒や反物などの荷を積んだ川船が往来していたという。明木川沿いには、その当時の船着場跡の石組みが残っている。今でも、川に沿って建つ民家の裏手には川に降りる階段や小道が残っていて、川を積極的に生活に取り入れてきたことがわかる。

川の水は澄んだ流れで、ハヤやアユなど清流に住む小魚の姿が見え、流れの緩い淀みにはなんとメダカが泳いでいた。当地でツガニと呼ばれるモクスガニも夏から秋にかけてカゴ網で獲れるとのこと。まだまだしっかりと自然が生きていることを実感した。

明木市の歴史



船着場跡らしい川沿いの石組み。付近の川の水位は非常に浅いが、かつては川船が運航できる水深があったのだらう。

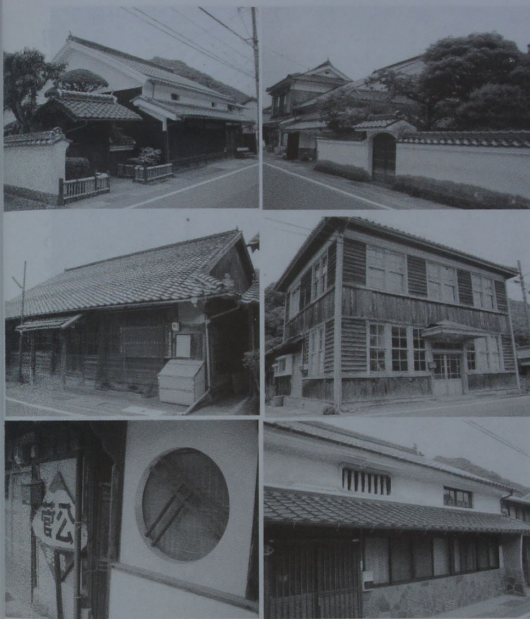
●萩往還沿道メモ
用水路



かつては生活用水を取水したと思われる用水路が町中を走っている。傾斜があるため、清冽な水が勢い良く流れている。

明木市の町並み

MAP 12



ざっと見ると赤い石州瓦屋根の続く町並みだが、一つひとつを見ていくと個性的な建造物も多い。

(写真右上)「旭鶴」ブランドの瀧口酒造は、明治初年の創業、邸内には立派な庭園、白壁の蔵が建っている。(写真右中)モダンレトロな雰囲気の建物はかつての郵便局。(写真右下)虫籠窓のある建物はかつて宿駅の用務にあたった目代所もくだいがあったところ。目代所とは人・荷物・書状などを輸送するために必要な人馬や駕籠の調達、経費の出納事務を行っていた。(写真左上)立派な門構えの平屋造りは、昔の料理旅館、現在家屋前が防長バスのバス停となっている。(写真左中)かつての養蚕所であった建物が現在は公会堂として使用されている。(写真左下)普通の民家の白壁にも、おしゃれな丸窓など、明らかに街道を通る人たちを意識したと思われる意匠がそこかしこに見られて楽しい。



瀧口酒造の邸内。立派な白壁蔵と庭園が美しい。軒下に並んだ陶器製の酒樽が何ともおしゃれだ。

●秋往還沿道メモ

秋往還まつり「技・明木展」



毎年五月のゴールデンウィークに開催される地元住民による手作りイベント。萩焼や木工細工など工芸品を中心に地域物産の展示即売が行われる。県内外から多くの観光客で沿道が賑わう。

萩往還と

あかまがせき

赤間関街道の分岐

MAP 13



堂尾一里塚跡付近に建つ荒神様。土地を最初に開墾した時に祀った神様で「地神」とも言う。祠のとなりには庚申塚が建つ。

赤間関街道は、萩城下町と九州や大陸への玄関口であった赤間関

(下関) を結ぶ主要街道。萩往還とは明木市で分岐し、呑水峠から吉

田、小月を経由して赤間関へと至る。正義派と俗論党との「大田・

絵堂の戦い」で有名な絵堂もこの街道上にあり、幕末から明治維新

へ歴史の立役者が駆け抜け抜けた激動の道。分岐点を示す道標はJ・A・明

木支所の建物の角に移設されており、よく気をつけていないと見過

ごしてしまう。道標は慶応三年(一八六七)の建立で、「右せき道」

「左山口道」と刻まれている。本来の分岐点は道標の場所から一升谷

方面に二〇〇mほど坂を上がったところ。分岐点の向かいには唐樋

札幌から数えて二つ目の堂尾一里塚があったが、現在は遺構がなく、

その付近には荒神様の祠や庚申塚、地蔵尊がある。

●萩往還沿道メモ

明木神社



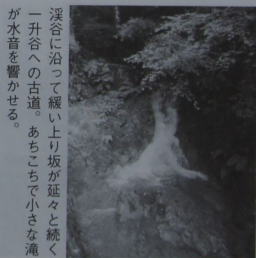
分岐点の北側にある高台の上の神社。秋季例大祭で奉納される「お供え行列」が有名。弓・箱・赤傘・台傘・槍・中道具・杖を持ち「イサヨシ、ヤマトマカセ、ヨイコラハノハ、ヨイヤサノサ」と声を掛けながら街道を練り歩く。

いっしょうだに 一升谷の石畳道

MAP-14



明木市を過ぎて国道二六二号の下をくぐり一升谷に続く山道に入る。ここから五文蔵峠・新切までの上り坂は、往還の面影を最もよくとどめている。なだらかな登りが約一里(四km)あまり延々と続くため、相当に疲れてくる。「一升の煎り豆を食べながら歩くと、坂を登り切るまでにちょうど食べつくしてしまう」ということから「一升谷」と命名されたとか。路傍には最高地点(標高三四六m)まで「二合目・一合目……」と区切りとなる標識が立てられている。古道には風雨や流水による損壊を防ぐため約三尺幅の石畳が要所所に配してある。(現在、埋もれていた石畳が延長三〇〇m以上にわたって確認されている。) 整然と組まれた石畳が山道に続く風景はとても美しい。またこの行程はずっと茶屋川に沿っており、小さな滝やせせらぎが涼しさを運ぶ。



●萩住園沿道メモ
深谷に沿って緩い上り坂が延々と続く一升谷への古道。あちこちで小さな滝が水音を響かせる。

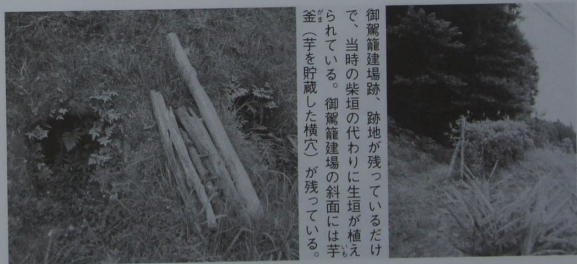
●萩住園沿道メモ
根の迫石橋



●萩住園沿道メモ
茶屋川に架かる長さ約二・五mの石橋。左側の四本は玄武岩、右の二本は瀬戸内海黒髪島の御影石で復元したもの。ここから十合目(頂上)の五文蔵峠までは、次第に傾斜が強くなる。橋を渡ると、トイレ・休けい所が設けられている。

かみ
上の茶屋と下の茶屋

しも
MAP 15



御駕籠建場跡、跡地が残っているだけで、当時の柴垣の代わりに生垣が植えられている。御駕籠建場の斜面には手釜（宇を貯蔵した横穴）が残っている。

五文蔵峠を下りしばらくすると、谷間に開けた集落に出る。一升

谷の難所を越えてきただけに、休憩のための御駕籠建場も用意されていて、殿様一行は名物の桜茶（塩漬けにした八重桜の花のお茶）を楽しまれたという。御駕籠建場をはさんで手前に下の茶屋、上手に上の茶屋があった。殿様がお着きになると、この下の茶屋の娘二人が桜茶を点ててお振る舞いしたという。御駕籠建場の遺構は残っておらず、道から少し上った小高い場所に、かつては御駕籠を据える台が二基、そして仮設の手洗場があった。悴坂の御駕籠建場と較べるとここは極めて小規模なもの。右頁の写真は上手から撮影したもの。手前の家屋が上の茶屋のあった田村家、中央のこんもりした林の麓が御駕籠建場の跡、左奥の家屋が下の茶屋のあった河村家。

●萩往還治道メモ
中ノ坪下一里塚（復元）



ここは萩からちよつと三里、中ノ坪下の一里塚がある。土台の石組みは復元されたものである。ここから三田尻まで九里、ようやく全道程の四分の一。

落合の石橋 (国登録文化財) MAP-16



七賢堂展望台からの遠望。遠く日本海の漁火が見えるという。残念ながら竹藪に遮られて手前が良く見えない。

中ノ埵下の一里塚を過ぎて、またしばらくの間、山道に入る。現

在の国道二六二号と合流する手前に、平成八年（一九九六）に整備された七賢堂の展望台がある。ここから遠望すると遥か秋沖（秋市三見沖）に浮かぶ漁船の漁火が見えるという。

展望台を過ぎて、しばらくは国道沿いの道を歩き、新茶屋を経て落合に至る。田畑のあぜを縫うように続く古道を歩くと、落合の石橋が現れる。がっしりとした堅牢な橋をイメージしていたが、どちらかと言えばきゃしゃでスマートな石橋。橋長二・四m、橋幅一・七mの石造りの笏橋、石組みの両岸から柱状の石材が桁として突出、その上に板石を載せた形態で、山口県特有のものとされる。石材は玄武岩。平成十一年に国登録文化財に指定された。

●萩往還沿道メモ

七賢堂展望台



展望台は六角屋根のしゃれたデザイン。その奥に崖に突き出すように展望橋が設置されている。リアルに描かれた遠望イラストの解説板が設置されているが、「竹藪を取り除いた想像図」との断り書きがある。

佐々並市

MAP 17



御茶屋跡はその後佐々並小学校となり現在は空き地となっている。当時の遺構は完全に失われている。



かつて萩往還の宿場町として栄えた佐々並市。江戸後期の屋敷数は六十二軒、御茶屋や御客屋などの休泊施設のほか、目代・伝馬・

人夫などの通信・運搬施設が置かれていた。往還が参勤交代の道として整備されるまでは山中の小さな農業集落であったため、宿駅の経営は村にとって大きな負担であった。そのため宿駅の運営費は藩が負担したという。関ヶ原の合戦に破れ防長二ヶ国に減封された毛利輝元が萩に移る際にこの地で休息したといわれ、それにちなんで御茶屋が建てられたと伝えられている。その御茶屋は旧佐々並小学校の敷地内であったとされる。御茶屋は面積約二〇〇坪、本館、御長屋門、御蔵、御共中腰掛、仮御馬立二ヶ所、それに御番所があったというからかなり大規模。後年、往來の通行が頻繁になると、他国からの使者などが宿泊する御客屋が設けられ、賑やかな街道の街へと発展する。

●萩往還沿道メモ

佐々並市遠景



集落の真ん中を走るメイン道路は昔と同じく鐘型に曲がっているのがわかる。

佐々並市の町並み

MAP 18



三浦酒造隣の民家の軒下。上部には玉ネギをつるし下には梅が干されている。自然とともに生活をたてる、ゆったりとした時の流れを感じる風景だ。



明木と同じく、佐々並も石州（島根県石見地方）の赤瓦屋根が特徴。瓦の正面の模様は山陰名産スワイガニを模したデザイン。



鍵型に曲がった佐々並市の町を歩いてみる。明木市と同じく個性

豊かな家々が並ぶ。（写真左中）虫籠窓を持つ商家風の建物は昔の呉

服屋、江戸時代の高札場もこの近辺にあった。（写真左上・右中）

佐々並の地酒として各種品評会の賞を総なめになっているブランド

「銀嶺」の蔵元・三浦酒造。酒屋の裏が酒蔵で、こちらは大正年間の

創業。（写真右下）そして佐々並といえば昔造りの「佐々並豆腐」。

創業は一八〇〇年、現在の当主でなんと九代目、萩往還の宿場町の

「土地の味」として創り始められ、初代総理大臣・伊藤博文公が好ん

で食べたと言われる名産品。（写真左下）佐々並豆腐を製造する土山

商店の向かいには、豆腐フルコース料理を提供する林屋旅館がある。

通り沿いの民家軒下、上部には玉葱を、下の縁台には梅を干す何と

も懐かしい風景もここにはある。

●萩往還沿道メモ

佐々並市頭一里塚（復元）



御茶屋跡を過ぎてすぐのところに、萩から四番目の佐々並市頭一里塚がある。道標の右側面に「南方従 三田尻 船場八里」、左側面に「北方従 萩唐 船場四里」とあり、萩から四里、三田尻船場まであと八里を示している。

ひなたせ 日南瀬付近

MAP 19



日南瀬橋跡。現状はガードレール付きのコンクリート橋。橋の真下に古い橋脚土台が見えるが、こちらもコンクリート製で、それほど古いものではない。水量の少ない時には、往時の土台の穴が三つ確認できるという。

佐々並市から日南瀬川沿いの道を進む。しばらく国道二二六二号を

歩き日南瀬橋跡から旧道に入る。日南瀬橋はコンクリート製の橋に架け替えられ往時の姿はない。日南瀬橋跡から約五〇〇m進むと、開けた場所に出て、休憩所とトイレがある。休憩所の奥にあるのが首切れ地蔵。伝承によると、昔、源助という商人がいて、その主人が萩城下で囲碁の試合中争いとなり、相手に討たれた。ある時、商売行脚の途中この地で休息しているとき、「汝が休みたる下に我が形あり……」と旧主からお告げが。源助が大急ぎで周囲を探索すると沼の中から頭だけの地蔵が出てきた。供養を済ませて、その後旧主の子息が見事仇討ちを果たしたことから信仰を集めるようになったという。首切り地蔵の名前の由来は、もともと頭部のみの地蔵であったことから。ここから道は小高い丘を越えて、長瀬川沿いの県道六二二号に合流する。

●萩往還沿道メモ

日南瀬の石風呂（復元）



内部で火を焚き、底の石を焼いて海草を敷きつめその上で休んだという。疲労回復や神経痛やリウマチに効果があったとの事。今のサウナもしくは岩盤浴に近い施設。

上長瀬一里塚

MAP 20



長瀬川沿いに県道六二号を行く。長瀬の集落を過ぎると上長瀬一里塚。道標は存在せず、半球形に近い形の石組みが残っている。こゝ上長瀬にある半球形のポリウムがある石組みが往還道一里塚の原型で、その形がもともとも良く保存され、数少ない近世の交通関係遺跡として大変貴重という。こゝは萩から五里、三田尻船場へ七里の地点。一里塚を過ぎてすぐ、「逆修石」の説明板がある。このあたりは「一の坂銀山・金山谷」と呼ばれ、一六〇〇年頃に栄えた。銀山を見つけた宇多川備後守は、数百日の間、人力を尽して鉦山を掘ったが、鉦脈を見つけないことが出来ずあきらめて防府まで戻り宿をとった。その夜、太陽が懐に入る夢を見たので急いで一の坂にひき返し鉦山を掘ったところ大量の銀が産出したとの伝説がある。

逆修石とその説明板、そばで見ると結構巨大な岩の塊。「逆修」とは、生前にあらかじめ自分のために仏事を修めて冥福を祈ること。



●萩往還治道メモ

一の坂銀山跡



江戸時代初期に採掘されていた防長最大の銀山。盛期には数千人の鉦夫がいたと伝えられ、藩財政に大きく寄与した。現在五十を越える間歩(鉦口)と精錬所跡、鉦山町跡が確認されているが、往還道から約六〇〇m東に外れた位置にあるため、道は荒れ、現地は草木に覆われ鉦口も確認が難しい。写真は銀山跡に立てられた吹屋(精錬所)跡の案内看板。

なつきばらこうや ひむろ
夏木原口屋・氷室跡 MAP-21



●萩往還沿道メモ

吉田松陰東送の碑



安政六年（一八五九）五月、松陰先生は幕府から東送を命じられ、往還の途中、ここ夏木原でしばしの休憩をとられた。その際の感懐を七言絶句に詠まれた。

長瀬からさらに県道六二号を上ると夏木原キャンプ場に着く。こ

こ夏木原は冬期に厳しく冷え込むため、明治の中頃まで、氷室の中で木桶やブリキ缶に入れた水を凍らせて、その周りを炭灰や糊殻（もみがら）で保冷し夏季まで氷を保存した。氷室の構造は大屋根の下に土塁を築き深く掘り下げ、地下水の気化熱によって周囲より冷涼にするもの。涼しい山中では夏季まで氷を保存することが可能だった。当時、夏場の氷は非常に貴重なものであり、一部上流階級の人たち以外には縁のないものであったが、山口の祇園祭（ぎよんまつり）などでは、夏木原から馬で運ばれた「かき氷」が珍しがられ、飛ぶように売れたという。また、ここ夏木原には口屋（くちや）があった。通行人の取締りを行った関所の小規模なもので、口屋銭（くちやぜに）といって一種の通行税も取っていた。

縛吾百命致関東

对簿心期質契符

夏木原頭天雨黒

満山杜宇血痕紅

吾れ縛し命もて関東に致る。

簿（ぼ）に対し心に期す、異宮に質する。

夏木原頭、天雨黒く

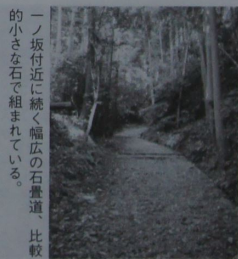
満山の杜宇、血痕紅なり。

私は幕府の命令で江戸へ送られるが、自分の意見は、天の神に正したらわかるはずである。自分は、公明正大である。ここ夏木原では、さみだれがしとしと降り、ほととぎすが、しきりに鳴いている。ほととぎすは、血を吐くまで鳴くというが、その血で、このあたりのさつき・つつじも真紅に燃えている。自分の胸中もまた同じ思いがする。

防長国境の碑

くにざかい

MAP 22



一ノ坂付近に続く幅広の石畳道、比較的小さな石で組まれている。

夏木原から萩往還の最高所となる板堂峠いただかとうげに向かう。道の左手、山の斜面に大きな花崗岩の石碑、これが防長国境の碑。周防・長門の

二国はいずれも毛利家の所領、この国境争いが起こりようもない防長二州の国境にもちゃんど国境碑がある。これは萩城下から三田尻に至る往還に一里塚が設けられたのに併せて建てられたものと思われる。高さ一二〇cmの石碑には「北 長門国 阿武郡」「南 周防国 吉敷郡」、裏に廻ると「文化五年（一八〇八）戊辰一日建之」と建立の年月が刻まれている。この地は萩から約五里半、萩往還の中間点（一ノ坂一里塚付近）まであと少しの距離だ。往還はここから県道六二号から別れ、21世紀の森付近をショートカットして一ノ坂一里塚・六軒茶屋方面に向かう。このルートも幅広の美しい石畳の道が続く。ここから天花畑てんかたばたまでの一ノ坂は、往還最大の急坂であり難所であった。

●萩往還沿道メモ
21世紀の森



県道六二号の最高地点（標高五一〇）付近にある森林学習展示館。北アメリカやヨーロッパ・アジアなど世界各国の樹木や森が再現されている。

一ノ坂建場跡(六軒茶屋) MAP-23



差図(図面)から想定復元された一ノ坂の駕籠建場、二基の駕籠を置く台がある。

萩往還の中間点であり、街道中最大の難所であった一ノ坂に、一

ノ坂御建場が設けられていた。山口方面が遠望できる休憩施設で、街道を行く人々は一時荷を解いて足を休めた。案内板によると駕籠建場と殿様用、重臣用、下級武士用と階級別の茶屋建物四棟・仮屋二棟などが設置されている。敷地跡を見る限り、これまでの駕籠建場と較べても格段にスケールが大きい。現在の建造物は山口県文書館に保存されている図面をベースにその一部を想定復元したものの。六軒茶屋では、民家の軒先で茶店も営まれ一般の旅人で賑わったという。なお、一ノ坂御建場跡(六軒茶屋)の正確な位置については諸説があるようだ。この先、次の休憩地「山口御茶屋」を目指して萩往還の坂道は続いていく。

●萩往還沿道メモ 石畳の道



一ノ坂周辺は傾斜のきつい山道となるため、石畳を葺いた箇所が多い。一升谷の石畳と比べてその幅は道一杯と広く、木立の中に伸びていく石畳はとても美しい。写真は六軒茶屋跡前の石畳。(表紙カラー写真)

萩を知ろう！萩を楽しもう！萩を伝えよう！

■シリーズ「萩ものがたり」既刊タイトル

タイトル名	著者	定価
①萩の椿	吉松茂	600円
②高杉晋作100問100答	一坂太郎	500円
③萩開府—毛利輝元の決断—	北村知紀	600円
④萩まちじゅう博物館	西山徳明	600円
⑤松陰先生のことは—今に伝わる志—	萩市立明倫小学校(監修)	500円
⑥密航留学生「長州ファイブ」を追って	宮地ゆう	600円
⑦萩と日露戦争	一坂太郎	500円
⑧萩の巨樹・古木	草野隆司	600円
⑨吉田松陰と現代	加藤周一	600円
⑩萩沖の魚たち(春・夏編)	中澤さかな/堀成夫	600円
⑪萩の史碑	一坂太郎	500円
⑫山田顕義—法治国家への歩み	秋山香乃	600円
特別編 ますらをたちの旅【長州ファイブ物語】	一坂太郎	1300円
⑬川柳中興の祖—井上剣花坊	大庭政雄(監修)	600円
⑭高島北海 HOKKAI 萩とナンシー	高樹のぶ子	600円
⑮桂小五郎	一坂太郎	500円
⑯萩沖の魚たち(秋・冬編)	中澤さかな/堀成夫	600円
⑰若き日の伊藤博文	一坂太郎	600円
⑱宮本常一が見た萩	中澤さかな	600円
⑲海を渡った長州砲—ロント	郡司健	600円
⑳萩往還を歩く	中澤さかな	600円

TRC102078

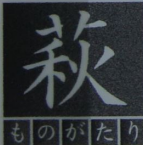
販売所/萩博物館・萩市観光局
※郵送での購入は、萩もの

萩もの

年会費2,000円()

* 定価割引の特典があり
お申し込み方法

会費のお支払い方法



有責任 萩ものがたり
中間法人

〒758-8555 山口県萩市大字江向510番地

TEL 0838-25-3233 FAX 0838-26-5458

http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/portal/book/booklet.html

E-mail story@city.hagi.yamaguchi.jp

購読ができます。

(4・10月発行)を定期配本。

無料!

住所、氏名、電話番号をご記入ください。

ごみもお受けします。

ごお届けします。

ごめします。

山口県萩市は、本州西端に位置し日本海に面します。江戸時代は毛利三十六万石の城下町として栄えました。幕末には吉田松陰をはじめ多くの逸材を輩出した明治維新胎動の地として知られています。

このようなことから全国に例をみない近世の都市遺産、明治維新関係史跡や史料、近代日本の礎を築いた多くの人物に加え、北長門海岸国定公園の自然美など「宝物」ともいえるべき資源に恵まれています。

しかしながら、明治維新は風化しつつあると言われるように、かつては萩に伝承されてきた物語などが消えつつあります。

毛利輝元が安芸の国(広島県西部)から萩の地に移封され、開府してから、平成十六年(二〇〇四)は四百年の節目となります。

そこでこれを機に、萩に残る厚みのある歴史文化・人物、豊かな自然、多彩な行事や風物、民間伝承、伝統産業など、後世に語り継ぐべき萩のすべてをブックレット・シリーズ「萩ものがたり」として定期的に刊行し、後世に伝承することにも、全国に向け発信することとしました。

読者の皆様が、この小冊子を活用され、萩の素晴らしさを楽しみ、理解する一助となるよう願ってやみません。

刊行のことは

山口県萩市は、本州西端に位置し日本海に面します。江戸時代は毛利三十六万石の城下町として栄えました。幕末には吉田松陰をはじめ多くの逸材を輩出した明治維新胎動の地として知られています。

著者紹介

中澤 さかな (本名：等)

1957年滋賀県生まれ。関西学院大学卒(水産地理学専攻)、1980年(株)ルート入社、2000年4月、萩市に移住。道の駅/萩しーまーとの駅長を務めるかたわら地域振興にかかわる。論文に「紀州雑賀崎漁民の生活誌」、「地域活性化の小規模ビジネスモデル」、著書として同シリーズより「萩沖の魚たち(春夏編)」「同(秋冬編)」「宮本常一の見た萩」など。



定価 600円 (本体571円+消費税29円)

萩往還は、萩城下町の唐樋札場と三田尻（現在の防府市）を結ぶ約五三kmの街道。参勤交代道として慶長九年（一六〇四）に整備された。街道中の難所と呼ばれた山越えや峠付近には今も多数の石畳道が残り、延々と続く古道が往時の街道の姿を留めている。ルート上には一里塚や御駕籠建場跡・茶屋跡などの遺構が残り、また宿場となった街道筋の集落には往時の面影を偲ぶ風物が今に伝えられている。



秋市立萩図書館



111429072

Vol 00
萩往還を歩く

2008年10月1日 第1刷発行
著者 中澤さかな (萩ものがたり編集部)
発行者 野村興児
発行所 有限責任中間法人 萩ものがたり
印刷 有限会社マシヤマ印刷

1
萩

ものがたり